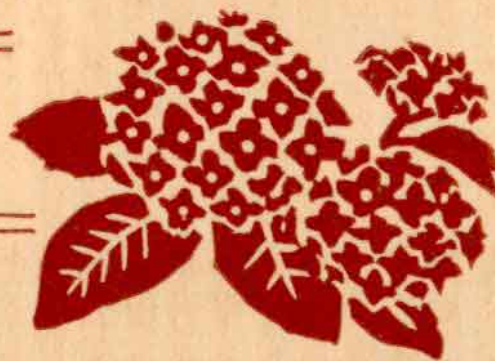


角川文庫

—1267—

女 同 士

石坂洋次郎



角川書店



庫 文 川 角

士 同 女



昭和三十年九月十日 初版發行
昭和四十三年五月三十日 三十五版發行

定價百圓

著者 石坂洋次郎

發行者 角川源義

印刷者 中内佐光
東京都千代田區飯田橋一ノ二

發行所

東京都千代田區富士見二ノ十三
振替東京一九五二〇八

株式會社 角川書店
電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・亂丁本はお取替え致します

Printed in Japan

曉印刷・大谷製本

女 同 士

他 七 篇

石 坂 洋 次 郎



角 川 文 庫

1267

目次

くちづけ

忘れ得ぬ人々

若い娘

女同士

リヤカアを曳いて

栗盗人

マギの戀

草を刈る娘

解説

平松幹夫

二四

二七

二四

二五

二七

二八

二九

三〇

三一

くちづけ

私ははじめて男の人と接吻した。相手は同級生の河原健二である。私たちは果して戀愛關係にあるのか、また將來結婚することになるのか、いまのところ、まだハッキリしない。それなのにどうして接吻する氣になつたのか、私にもよく分らない。ともかく二人とも、ふつとそんな氣になつたのである。

私がB大學の文學部の入學試験にパスした時、母はこんな注意を與えた。

「多勢おおぜいの男の學生の中に混まじるのだから、よつぽど氣をつけないといけませんよ。それからくみ子や、アメリカあたりの女子大學生は、ほとんどが在學中に旦那様だんなさまを見つける目的で學校に入るんだそうだが、私もそれは結構なことだと思いますよ。長い年月をかけて、ゆつくり多勢の男性を觀察かんさつ出来る立場に置かれるわけだから、そこで選んだ相手なら、まず間違いない人物だと思うからね」

「いやあねえ、お母さんは。せつかく勉強しようと思つて張りきつてゐるのに、イヤなことを言わないでよ」

「勉強も結構ですよ。でも、女が學問をするの、社會人として進出するのたつて、理窟りくつの上だ

けのことで、女の世界というものは限られていますからね。何と言つたつて、女は家庭の主婦になることが一番ですよ」

「イヤよ、イヤだわ!」

「お前がいくらイヤだと言つても、お前が利口な娘だつたら、生涯の伴侶を見つけることも、大學生活の一つの目的だという私の言葉は、いつもお前の胸の底に消えずに残つていくことですよ」

残念だがその通りだつた。多勢の男子學生との交際がはじまるにつれて、この中に私の未來の夫がいるのだろうかという意識が、いつも私の頭の中にこびりついてるようになった。考えてみると、女にとつては、結婚ということが何よりも大切なことだし、したがつて、生涯の伴侶を見出す心遣いを怠らないということは、少しも恥ずべきことではない。母の言葉は正しいのである。

これは會社の重役をしている伯父の話だが、婦人社員の中には確かに優秀な人もいる、だからと言つて、内外共に責任のある地位につけるといふわけにはいかない。何故なら、外部に對して、日本の社會は、まだ男子でないと事が圓滑に運ばない場合が多いし、内部的にも婦人では一般に抑えが利かないのだ。理窟がそうだからつて、よその會社でやらないことを、自分の會社だけでやると、それだけ會社のマイナスになつてしまう。だから、自分の會社でも、婦人社員は重要なポストにはつけないことにしている。出來れば、若いうち勤めて、會社の空氣を和やかにする役目を果たしたら、適當な相手を見つけて結婚し、それを機會に會社を退いてくれることが一番希望しい……。伯父のそういう言葉は、私達の耳に快いものではないにしても、日本の社會では、婦

人がまだそういう扱いをされていることは確かである。とすると、いい結婚をすることが、婦人にとつては、ます／＼大切なことになる……。

はじめて多勢の男子學生の中に混つた時、私はすつかり上つて萎縮してしまつた。だが、慣れるにつれて、學校の生活を楽しく感じるようになった。女だけの學校の場合とちがつて、おたがい樂屋を知りぬいてる息苦しさがなく、すべてが大まかで、素朴で、明けつぱなしである。しかも、男對女の比率が十對五ぐらいの所なので、どうしても女が大切にされ、私達には、まことに居心地のいい環境なのだ。

男女の學力の比較はどういうことになるのかと、興味をもつて眺めていると、ずうと上位と下位の席次は、男子の學生が占め、女子の學生は中位の席次に多く名前を列ねていた。ということからは、男子の方は勉強家と怠け者（怠け者の方がずうと多い）ており、女子の方は豫習や復習は一通りやつてくるということを示しているのである。そして、人間としての比重は、いまのところ残念ながら、女子は男子に及ばないようである。創造の才、判斷力、實踐の氣魄。そういったものでは、男子の方がグンとすぐれている。しかし、それは絶對的なものではなく、いままで女子に、そうした才能や力を養う機會が與えられなかつたというだけにすぎない……。

毎日接觸していると、男子の學生を珍しく感じる氣持がしだいにうすれて、一年もすると、なんの感興も覺えなくなつた。母の言葉を忘れてるわけではないが、こう年中顔をつき合せている間柄では、今さら戀愛だなんていう情熱が湧き起りそうもない。私も戀愛するかも知れないし、

また誰かと結婚するにちがいないのだが、どちらの相手も同窓の男性ではなさそうな気がする。お互いの間に、少しばかり夢がなければ、結婚も戀愛も成り立つものではない。

この氣持は私だけではないと見えて、同窓の男女學生の間には、あんがい戀愛關係に陥つたのが少い。たつた一組、女子の方が妊娠して、二人とも學校を止めて結婚した例があるが、その二人はどちらも感覺的な欲望に弱い人間だつたし、あまりに好意は感じられなかつた。もちろん、戀愛している者は、男子にも女子にも、いることはいたが、相手はみなよその社會の人間だつた……。

というようなことで、私たち共學の男女は、どちらも中性化した感じで、お互いの性の差別が日々にうすれていくばかりだつた。しかし、友だちはしぜんに出來ていつた。私も三年生になるまでに、三人ばかり親しい男子の友だちが出來て、女の友達も一緒に、泊りがけで旅行をしたり、映畫をみたり、東京に自宅がある者の家に集つて、みなで話しこんだりなどをして遊んだ。

河原健二も、そうして出來た男子の友だちの一人である。秋田の酒屋の息子だということだが、痩せて背が高く、しかしシンが強そうな身體つきをしており、顔は細面で、大きな黒い目の光が強いのが印象的だつた。都會でチャカ／＼と育てられたのでは、決してこんな顔は出來ず、やはり雪の深い田舎でのんびり育つた、どこか動物的な健康さをもつた顔である。氣象ものび／＼して、神經質なところが少く、都會育ちの私などには、少し齒がゆい思いをさせられることがしばしばだつた。

で、私達女子學生は、彼を健二クンと呼んでいた。健二クンが一番強く私に印象づけられたの

は……、まだ食糧事情がだいぶ窮屈なころだつたが、ある日、お晝休みに教室でお辨當を使つて
いると、隣席の男子學生が、私の方をのぞきこんで、

「くみの辨當すげえんだなあ。卵と奈良漬とつくだ煮と銀飯と……」と、勝手に人の辨當の内
容を数え上げた。それが健二だつたのである。

「いやあよ……」と、私は相手を睨みつけるついでに、健二クンの辨當をのぞいたが、色のく
ろい麥飯に、なにかのそぼろをうすくふりかけ、澤庵が二切れ添えてあつた。私は氣の毒になつ
て、

「もうお箸を使い出したんだけど、よかつたらお菜を分けて上げようか」

「いいねえ。……僕はくみが見どころのある女性だと思つていたよ」

「まずいお世辭ね」

私は、健二が差し出した辨當の蓋の上に、私のお菜を分けてやつた。それをうまそうに食べな
がら、

「これから食事時、成可く君の隣に坐るようにするからな。こんなものぐらい恵まれたからつ
て、君を戀いこがれたりするようなことはしないから安心しておくれよ」

「誰も心配なんかしないわよ……」

そのころ、私の家では、母が楽しみ半分に養鶏をやつていたので、卵なら不自由はしなかつた。
それで、健二に、たび／＼卵のお菜を分けてやつた。健二のもらいつぶりが、少しも悪びれずに
率直なので、そのことでは、かえつて私の方が楽しい氣持にさせられたほどである。女には男の

食事の世話をしやりたい本能があつて、健二は偶然、その本能を満たしてくれたのかも知れない。とすると、彼はまあラッキー（幸福）な男であらう……。

私と健二は、毎日學校で顔を合せているのだから、水が地面に浸みこむように、しぜんに親しくなつていつたのだが、その間にも、彼の印象を深める出来事がいくつかあつた。辨當のお菜のこともそうだが、もう一つの出来事は、いま思い出しても、かすかに胸騒ぎがするほどである。初秋のころだつた。教室では午後の授業がはじまつており、高臺たかだいの校庭には陽ひの光が溢あふれて、しんかんと静まりかえつていた。課業のない學生達が、そちこちのベンチや芝生しげふで、のんびりの日向ひなたぼこをしていた。細い紫色の煙草の煙が、透すきとおつた空氣の中に、美しくたゆたつて見えた。

私は、授業があるのだが、氣分が重苦しいので、教室に入らず、校庭の南側の銀杏いちょうの木の下ベンチに腰を下して、白つぼく煙つた東京灣を見下しながらボンヤリしていた。すると、何處どこかへ行つてたらしい健二が、急ぎ足で横の石疊いしだまの歩道をガツ／＼と歩いて來たが、私を見つけると寄つて來て、

「どうしたんだ、くみ？……僕は圖書館に入つてたら、うつかりしてベルを聞きそこなつたんだ。一緒に教室へ行こう……」

「私は休むわ。健二くんはいらつしやい」

「どうしたんだよ……」

その時、私が男の健二に對して、どうして正直なことを言う氣になつたのか、今でもその理由がハッキリしない。

「私、病氣なんだ。……まあだ、その期日にならないのに、急にはじまつたの。私、その準備もしてないし、困つちやつた……」

「――」

健二は固苦しい表情をして私の顔をじい見つめた。

「健二クンね、私が必要なものを紙に書くから、下の藥局に行つて買つて來てくれる？」

「ああ、いいよ……」

私は懷中手帖かいちゆうてちようの頁を一枚破いて、品物の名前を書き、それを小さく折り疊おたんで、五百圓紙幣きつを添そえ、

「はい、お願い。……紙をひろげて讀んだりしないのよ……」

「ああ、いいよ。ここで待つてろな」と健二は、大きな掌に、紙幣と紙切れをまるめこんで、門のある坂道を駈かけ下りて行つた。

私は悔くいも恥はじらいもなく、彼の後姿を見送つていた。そして、これという突つこんだ話を交かしたこともないのに、いつの間にこんなうちとけた氣分になつていたのだろうかと、いぶかしく感じた。

間もなく健二が紙包みを抱かえて歸つて來た。

「はい。お釣つりもだよ……」

私が洗面所に入つて出てくると、健二はまだ銀杏の下のベンチに腰かけていた。

「教室に行かなかつたの？」

「うん、休むよ。気分が抜けちやつた。山を下りてお茶でも飲もうや……」

「そうするかな」

私達は、カバンをぶらん／＼させながら、肩を並べて、長い坂道を下りて行つた。途中でふと私は、

「健二クンね、私が買い物を頼んだことを、仲間の話の種たねなんかしたら、健二クンを輕蔑けいべつするわよ」

「恐い顔おそをするなよ。僕にだつて年ごろの妹があるんだぜ。ちつとも珍めづしかあないよ。……女つて不便なものだなあと思つたまでさ……」

「それでもないのよ。神様が女だけをまずく作つたわけもないだろうし、男つて氣の毒どくだなと思うこともあるわ」

「なんで氣の毒なんだい？」

「子供等を味方みかたにした細君さいくんに頭を抑おさえられて、汗水あせみたらして働いていてさ……」

「フン。自分がそうするつもりでいやがる……」

晝休みがすぎたあとの街の喫茶店きっさてんは、ひつそりとしていた。そこらのテーブルには、まだ皿やコップが残つてるところもあつたし、學生達の残していつた體臭たいしゅうと埃ほこりが、かすかに室内に漂たつていた。私達は、隅すみのテーブルに坐つて、レモン・ティを注文ちゅうもんした。ふと、右手の壁かべにはまつた鏡

の中で、健二と私の顔がぶつかつた。その顔に、私はすなおに言つた。

「すまなかつたわね。女の用事にお使いだてをさせて……」

「お禮を言う柄かい。少年みたいな顔をしやがつて……」と、健二は、鏡の中の私をじいと思つめながら言つた。女つて、顔のことはしよつちゆう氣にしているものだが、健二が言つたことは、確かに私がふだん氣にかけていることだつた。

私は身長が五尺三寸ばかり、わりに均整がとれていて、肉づきもいい。輪郭から言えば、完全に一人前の女だが、目や鼻や耳などが刻んだようにハッキリしていて、顔の印象が、少年——いや、少女染みてゐるのだ。そういう顔には、化粧があまり向かないから、私はたいてい素颜でおり、服装も淡泊な色彩のものを着る用に心がけていた。その日は、グレーのスカート、水色のブラウス、それに半袖のピンクのセーターを着けていた。

「そうなのよ。私、身體の柄が大きく、その點は満足してるんだけど、でも、顔が子供染みてるでしょう。それをとき／＼物足りなく思うの……」

「なぜ物足りないんだい。いいじやないか、清潔な感じで……」

「清潔つて……人前ではそういう評語で満足出来るけど、もう二十歳をすぎた娘としては、もう少し男の心を牽きつける怪しげな魅力があつてもいいと思うの。イットと言うのかな……」

「やな奴だな。君の人生はこれからだし、そんなもの小出しに少しずつ出していけばいいんだよ。よく、女の人で、年が若いうちから、こま／＼ちやくれて美しいのがいるもんだけど、あんなの子供でも生んだら、すぐしぼんじやうんだ。室咲きの花みたいなもんさ。……それに較べると、

君の顔など、人がしほむころに、悠々と美しさを現わしてくるんだ。……いい顔だよ」

「うれしい！　ありがとう！　健二くんが、そういう手のこんだ賞め方を知つてようとは思わなかつた。じゃあ、私、遠慮なくベビー・フェイス（子供染みた顔）でいるわよ。……それからお返しのお世辭を言つと、健二くんも大器晩成型だと思ふな……」

「大器ではないが、晩成は確かだよ……」

私達は、熱いレモン・ティを啜りながら、鏡の中の相手の顔をチラ／＼眺めては話し合つた。レコードが「煙が目に沁みる」を演奏していて、ひつそりした楽しい一ときであつた……。

そのほかにもまだ、健二とのつき合いで、記憶に残つてゐることはいろ／＼あるようだが、グループで泊りがけの旅行などをしてゐるほどであるにも関わらず、個人的に印象づけられてゐることは、あんがい少かつた。というのは、私達は、男と女と二人ぎりの間で、刺激的な興奮した話にならないよう、それを私達の交際のエチケットにしていたからでもある。私達はみんな若いのだし、私達の中には、烈しい情熱と過剰な精力が秘められてゐるのだ。氣持をふしだらに緩めていれば、男と女の間で、簡単に興奮した關係が生ずる條件は揃つてゐるのである。だが、私達はそこにやすく／＼と迂り落ちないことに、學生としてのほこりを感じてゐたのだつた。

そして、こうした用心ぶかさは、單に戀愛問題だけでなく、學生生活のほかの面にも及んでゐた。私達は——いや、私は、私の生活のすべての面で、なまな興奮をさらけ出さないように、いつも氣を配つていたのである。例えば政治の問題であるが、私はその概念を理解することには努めるが、自らプラカードを掲げてメーデーの行列に参加するようなことにしない。まだその時期

ではないと思うのである。

いわゆる進歩的な學生達は、私共のことを日和見主義とか反動の手先きであるとか言つて輕蔑するが、果してそうであるかどうかは、もつと年月を経過してみなければ分らないことである。いま、平和を高唱し、再軍備反對を絶叫している進歩的な學生群が、社會へ出て、どういう生き方をしていくか、それを見極めてから、彼等と私共の比較をしてもらいたいものである。私自身は、私の情熱や精力を、なし崩しに少しずつ使つて、若いころも年とつてからも、あまり變化が目立たない、筋の通つた生活をしたいものだと思つてゐるのだ。

そういう意味で、私は刺戟的であることを恐れるのである……。

一昨日のことである。

十一月も半ばだというのに、汗ばむように温かい日和だつた。私と健二は、いつかの銀杏の木の下ベンチで、晝食のあとの腹ごなしとも思われるような、とりとめもない會話にふけつてゐた。健二は制服の上着を脱いで、白いワイシャツに陽の光を一杯に吸わせていたし、私もセーターを脱いで、水色のブラウスを、海から吹く微風で一杯に膨ませていた。——こう記すと、私がしよつちゆう健二と二人ぎりであるような印象を與えるかも知れないが、決してそんなことはなく、たま／＼この手記では、健二に關する思い出だけを拾ひ集めてゐるにすぎないのだ。といつても、私は健二が嫌いだなどと言うつもりはない。さて、私達の會話は——

「戀愛か……。かりにね、僕が誰かと戀愛したとする。と、僕は健康な男子として、相手を完